

「日々新しくされる器」

マタイによる福音書 9:14-17
コリントの信徒への手紙2 4:16

2026年2月1日
野村 友美 師

<新しいということ>

早いもので、今日からもう2月ですね。
新しい一年も一ヶ月が過ぎて、書類なんか「2026年」と書くのもやっと少し慣れてきたような気がします。
皆さんは今年になって、何か新しいことを始めたりなさいましたか？新しいことや新しいものは、私たちをワクワクさせてくれます。
今までになかった楽しさや便利さを、味わえるかもしれない。今まで知らなかった素敵なことに、出会えるかもしれない。今よりもっと、何か良くなるかもしれない。
そういう期待を、私たちは新しいものに対して感じるんじゃないでしょうか。

でも一方で、新しいものはよくわからなくて、面倒くさいところもあります。
例えば新しいスマホは、何をしたらどうなるのか、使い慣れるまではいろいろと手間がかかって大変ですよ。新しい環境や新しい人間関係は、落ち着くまで何かとトラブルがつきものです。だから私たちは、古くからあるもの、よく知っているなじみ深いものにこそ、価値を感じるところがあるんじゃないかと思います。
変わらないという安心、積み重ねられたものへの信頼、ずっと親しんできたからこそ分かっている魅力や、時間を費やしたという思い入れ。

ドキドキワクワクはしないけれど、心配することも少ないのが、古いものの良さの一つだと言えるでしょう。これさえあれば大丈夫、こうしておけば間違いなし。
そんな安心感を、今日のイエス様の言葉は揺さぶって、ざわつかせます。

<洗礼者ヨハネの弟子たち>

イエス様は徴税人のマタイを弟子にして、そのまま弟子たちと一緒に彼の家に行って、マタイの仲間の徴税人たちや「罪人」と呼ばれる人たちと、食卓を囲みました。
そして「なぜ罪人と一緒に食事をするのか」と議論を吹っかけてきたファリサイ派の人々に、イエス様は「わたしは罪人を招くために来た」と宣言なさいました。
その頃、と福音書はこの出来事が招いた、さらなる議論を紹介します。
洗礼者ヨハネの弟子たちがイエス様のところにやって来て、こう尋ねたんです。
私たちとファリサイ派の人々はよく断食をするんですが、どうしてあなたの弟子たちは断食をしないのですか？
「どうして」と言われても困るような質問ですが、これは当時の断食が意味していたことに関係がありました。
そもそもは年に一度の贖罪の日、イスラエルのすべての人たちの罪を清める儀式の日に、断食をするようにと律法で決められていました。
食事をしないことで自分たちの罪を償う、というわけです。それ以外でも、断食は神様に嘆きや願いを訴えるために、また悔い改めを表すためにも行われていました。
特に敬虔で信仰熱心な人たちは、イスラエ

ル全体の救いを祈って、週に2日は断食をしていたそうです。洗礼者ヨハネもその弟子たちも、「人々が罪を悔い改めて、救い主を迎えられるように」とこの週2日の断食を熱心に守っていたんでしょう。

なのに肝心の救い主、イエス様とその弟子たちは、断食するどころか罪人たちと一緒に食卓を囲んで飲み食いしている。

そのことに腹を立てて、ヨハネの弟子たちはイエス様に詰め寄ったんです。

あなたは、うちの先生が予告していた救い主なんでしょう？ だったら神様から遣わされた救い主らしく、弟子たちにも罪人たちにも断食させて、しっかり悔い改めるように教えるのが、あなたの役目じゃないんですか。そう言いたかったんでしょうね。

だからマタイの家での宴会に文句をつけたファリサイ派の人たちを、ヨハネの弟子たちは断食仲間として、さりげなく弁護しています。

「イスラエルの救い主だったら、ちゃんとそれらしくしてくださいよ！」と言わんばかりの彼らに、イエス様は結婚式のたとえで尋ね返しました。

「花婿が一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。」

神様とその民の結びつきは、旧約聖書のあちこちで結婚に喩えられています。ですからユダヤ民族にとっての救い主、メシアはまさに、神の民イスラエルを花嫁として迎える花婿でした。

このイメージになぞらえて、イエス様はヨハネの弟子たちにお答えになったんです。

救い主という「花婿」と今まさに一緒にいる人たちには、喜びにあふれた宴会こそがふさわしいじゃないか。

断食している場合じゃないよ、と言いながら、

でもイエス様はこの先に待っている悲しみの時についてもここで予告なさいました。

花婿が奪い取られる時。救い主としてやって来たイエス様が、人々の企みと暴力によって奪い去られて、十字架の上で殺されてしまう時。その時には、イエス様の弟子たちも嘆き悲しんで、救いを求めて断食することになる。この薄暗い予告のさらに先には、復活という予想外の喜びが待っているのですが、それについてイエス様は直接には語られませんでした。その代わりに、続けてイエス様は2つの小さな喩えをお話になります。

誰も予想できない新しい恵みが、これから引き起こされるという希望を、洗礼者ヨハネの弟子たちにも手渡すために。

1つめの喩えは、新しい布切れと古い服の話です。誰も織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをしたら、新しくて固い布切れは柔らかな古い服を引きつらせて、破れを塞ぐどころか、ますますひどくしてしまうだろう。

そして2つめの喩えは、ぶどう酒と革袋の話です。新しいぶどう酒を、古い革袋に入れる人はいない。だって、そんなことをしたら革袋は破れてしまうし、せっかくのぶどう酒もこぼれて飲めなくなってしまうんだから。

どちらの話も、当時の人たちにとってはとても身近で、「確かに」と頷けるものでした。特にぶどう酒と革袋は、この時代ならではの喩えだと思います。

現代の私たちにとっては、ワインの入れ物はガラスの瓶か、せいぜい缶や紙パックと

いったところでしょう。

イエス様の時代のパレスチナ地方では、ワインは動物の皮で作った革袋に入れるのが普通だったんです。作りたてのぶどう酒は、袋に入れてからも発酵し続けます。

ですから、新しいぶどう酒をうっかり古くて固くなった革袋に入れると、膨らむ力に耐えきれなくて破けてしまう、ということもよくあったのでしょう。

それだけじゃありません。

「新しいぶどう酒」という言葉はユダヤ人たち、特に聖書に親しんでいる人たちにとっては、特別な響きを持つ言葉でした。

当時の人たちにとっての聖書、今の私たちが旧約聖書と呼んでいる文書では、新しい酒と穀物やオリーブ油が、神様からの恵みの象徴としてよく使われています。だから「新しいぶどう酒」の喩えを聞いたヨハネの弟子たちは、これは神様からの恵みについての話だと、すぐに気がついたでしょう。まだ水にさらして柔らかくしていない、真新しい布切れのように。

そして発酵して膨らみ続ける、新しいぶどう酒のように。

神様が私たちにお与えになる恵みは、古いやり方に収まり続けるようなものじゃない。

それどころか、私たちの慣れ親しんだ常識や習慣をうち破ってあふれ出すほどに、生き生きとした力がある恵みだ。そうイエス様は、この2つの喩えで伝えておられるんです。

<日々新しくされる器>

先にイエス様が話された結婚式の喩えと、この新しい布切れやぶどう酒の喩えは、一見あまり関係がないように思えるかもしれません。この時イエス様が話された喩えは、どれも「時に

応じて、ふさわしく」ということを教えておられるんです。

「花婿」に喩えられた救い主、イエス様が一緒におられる時には、断食して救いを祈るよりも、食卓を囲んで喜び祝う方がふさわしい。

これから神様が引き起こそうとしておられる新しい恵み、イエス様を通して実現される救いの恵みを受け取るには、古い儀式じゃなくて新しい生き方こそがふさわしい。

この「ふさわしい」ということを、今日の喩えでイエス様は伝えておられるんです。

「週2日の断食」を信仰の物差しにしていたヨハネの弟子たちの生き方を、イエス様は古い革袋にたとえました。

新しい革袋が、新しいぶどう酒の動きと膨らみをしなやかに受け止めて、それを飲む人にしっかりと届けるように。

生き生きと動いて膨らむ神様の恵みを受け止めて、他の人たちに届けるためには、それにふさわしい新しさが必要だ、とイエス様は教えておられます。

神様からの新しいぶどう酒、イエス様という目の前の存在を、まだ受け止めきれないでいる彼らに向かって。

とはいえ、「新しければ良い」とは言い切れないところも、あるんじゃないでしょうか。積み重ねてきた経験や知恵は、しばしば私たちを助けてくれます。

昔ながらの決まり事は、必要があって生まれてきたはずです。そして何よりも、私たちはみんな時が経てば年を取って「古い」人間になるものです。

どういう状況であれどういう環境であれ、時は過ぎていきますし、生きている限り、

人はみな平等に歳を重ねるでしょう。

足腰が痛い日が多くなるし、あちこち病気も出てくるし、記憶力もだんだん心もとなくなってきました。老眼で小さい文字は読みづらくなるし、去年は軽々と動かせた机が今年は何だか重たいです。同じようなもどかしさや切なさを、新約聖書に登場する使徒パウロもきっと味わっていたんじゃないかと思います。

イスラエルを飛び出して、イエス・キリストの愛と救いを伝えて旅をしたパウロも、その旅の中で、自分の弱さや限界をひしひしと感じていました。

新約聖書の使徒言行録やパウロが書いた手紙によると、彼はどうやら何かしらの病気も患っていたようです。

それでも、いえ、だからこそ、パウロは気にかけていたコリントの教会への二通目の手紙で、こんな言葉を書き送りました。

「だから、わたしたちは落胆しません。

たとえわたしたちの『外なる人』は

衰えていくとしても、

わたしたちの『内なる人』は

日々新たにされていきます。」

(2 コリント4:16)

私たちの外側、この体や能力は日々衰えていくばかりかもしれません。しかし私たちの内側は、とパウロは希望の光を掲げています。

私たちの「内なる人」、私たちの心と思いは、神様によって日々新しくされていくのだと、パウロは生き生きとした希望を宣べ伝えているのです。

「新しいものが良い、古いものは良くない」とは限りません。それこそ時間が経って熟成した古

いぶどう酒のように、受け継がれた伝統や知恵にしか担うことができない役割があるでしょう。

ただ、イエス・キリストという救い主を通して、神様が私たちに差し出された恵みは、「まさか、こんなことが！」と驚くようなことを引き起こすものです。

何が起きるか、どうなるのか、誰にも予想できない救いの恵み。大きさも形も決まっていない、味わいもそれぞれに違う、そんな新しいぶどう酒のような恵みが、イエス・キリストという御方によって、今もすべての人に差し出されています。

この恵みを届けるための革袋が、教会という信仰共同体なんです。

私たちは、生き生きと動いて膨らむイエス・キリストの愛と救いを受け取って、それを喜ばしい恵みとして届けるための革袋です。今も聖霊によって私たちと一緒におられ、生き生きと働かれている救い主。

イエス様が引き起こされる予想外の出来事を、しなやかに受け止めて、味わって、その幸いをすべての人に伝えるための革袋です。だから教会は、私たち一人ひとり、いつでも新しい革袋でいるために、「内なる人を日々新しくしてください」と神様に祈り求めるようにと招かれています。

愛と救いを引き起こす予想外の恵みを、日々新しい思いで受け取ることができるように。

イエス様が見せて聞かせて、味わわせてくださる出来事を、日々新しく喜べるように。私たちは今日も明日も明後日も、「日々新しくされる器」であり続けるために、ご一緒に祈り求めながら歩んでまいりましょう。